

ス甚ダ遺憾ト云フベシ

ウィダール氏凝集反應ニ就テ

(承前)

上田 計二

第三 室扶私病血清診斷應用

ウィダール氏反應ヲ應用シテ診斷シ得ルハ世已ニ定論アリ亦タ言ヲ弄スルノ要ナキガ如シト雖モ反應点(Reactionsgrünz)ト診斷トノ關係ヲ明カニシ合セテ此反應ガ病床上ニ如何ノ程度ニ利用セラ
ル、カニ就キ一言スルハ敢テ無益ノ業ニアラザル可キヲ信ゼリ而シテ反應点トハ室扶私菌ガ室扶
私患者ノ血清ニ逢フテ一定ノ變化ヲ起ス狀態ヲ示ス者ニシテ此一定變化ハ血清ノ混合比例即チ稀
釋度ニ由テ分量的操作ノ下ニ正整ニ發動セザル可カラザルナリ之ヲ「ウィダール氏ノ原著ニ問ヘバ
十倍ノ血清」(血清・凝集液 1:10)ヲ以テ「以下ニテ」ニテ凝集現象ヲ呈スルモノハ腸室
扶私ト診斷スルモ誤リナシ健康人及ビ他病患者ノ血清ハ此稀釋度ニテハ反應ヲ起スモノニアラズ
トセリ若シ「ウィダール氏」氏ノ言ニシテ信ズ可キモノナレバ窓扶私病ヲ診斷スルヤ實ニ一喫烟間ノ
作業ニ過ギサルノミ然ルニ「ステルン」氏ハ腸室扶私流行ノ襲撃ヲ受ケザル「プレスラウ」府ニ於テ
健康人及ビ他病患者ノ血清ヲ檢ミタルコト七十回其内二十回八十倍稀釋ニテ凝集反應ヲ呈セルモ
ノヲ見テ(Uber Fehler Quelle der Serodiagnostik)ヲ書シテ大ニ注意ヲ喚起セリ爰ニ於テ一派ノ人殊

ニ「ウイダール」氏ハ「ステルン」ノ實見セシモノハ曾テ室扶私病ヲ經過セシモノナラントノ理由ヲ以テ反對ヲ試ミタルモ「スクローウエル」氏立チテ「ステルン」氏ノ實見ヲ確ム可キ事實ヲ提供セリ氏ハ健康人及ビ他病患者ニシテ曾テ室扶私病ニ罹リタルコトナキ証アルモノ百人ノ血清ヲ檢セリ其内十倍稀釋ニテ反應セルモノ二十五回二十倍稀釋ニテ十回凝集反應ヲ呈セルモノヲ實見セリ次デ「ビベルスタイン」氏ハ十二名ノ醫士學生ニシテ決シテ室扶私病ヲ患ヒシコトナキモノヲ撰ビテ檢セシガ「スクローウエル」及ビ「ステルン」ノ實檢ヲ確ム可キ成績ヲ得タリト夫レ斯ク健康人及他病者ノ血清ニ凝集力ヲ有スル所以ハ誰モ慥カニ説明シ得ザル所ナリ「フレンケル」ハ室扶私菌ノ感染ヲ受クルモ潜伏シテ病ヲ發スルニ至ラザルモ然カモ血清ニハ一定ノ變化ヲ起シタルモノナラシ之レ虎列刺病ニ於テハ己ニ事實トシテ許サル、モノナリト雖ドモ室扶私菌ニ於テハ這般ノ實檢ニ徵ス可キモノナシ然シテ「ステルン」等ガ非室扶私血清モ亦凝集反應ヲ有スル事實ヲ指摘シテ吾等ニ注意ヲ與ヘタルカラハ今ヤ「ウイダール」氏ノ十倍稀釋法ヲ (Grenzverfahren) トシテ安ズルヲ得ズ殊ニ急性熱病ニ於テ十倍稀釋ニテ反應スルコトアランカ立ロニ誤診ノ不名譽ヲ受ケザル可ラズ「チームケー」氏ハ曾テ非室扶私患者二十八名ヲ檢シテ六名ノ血清ハ十倍稀釋ニテ實ニ積極反應ヲ呈セリト云フ其内一名ハ「マラリヤ」二名ハ「ツベルクローゼ」一名ハ急性性關節癱瘓質私一名ハ「ヒステリー」一名ハ慢性癱瘓質私ナリシト爰ニ又「ビベルスタイン」ハ健康人無熱病熱性病ノ三種ニ目安

ヲ立テ反應ノ強弱ヲ比較セント企テタルモ甲ニ強ク乙ニ弱シト云フ如クニ一定ノ標準トシテハ得ル處ナカリシト云フ然ラバ健康人及ビ他病者ノ血清ニ凝集力ヲ有スルモノアルハ今や疑フベカラズシテ寧ロ生理的ニ有スル防禦素(Alexin)ノ所爲トシラ考ヘ得可キカ如シ(Alexin)ト(Agglutinin)トハ同物ナルカ將タ異物ナルカハ今日之ヲ斷定スルノ實檢アルヲ聞カズト雖モ「グルウベル」氏ニ聞ケバ(Agglutinin)ハ細菌毒素ノ感能ニ由テ始メテ血中ニ生ズル者ナルカ故ニ室扶私患者ノ血清ト健康人血清トニ有スル凝集力ハ性質的乃至分量のニモ一定ノ差異ナカルベラズ而シテ感染セル細菌ノ異ナルニ從フテ血中生ズル凝集素ノ異ナルハ疑ヒナキガ如シ例令バ虎列刺菌ハ只ダ虎列刺ノ血清ニ由テノミ凝集セラレ志賀氏赤痢菌ハ同病患者ノ血清ニ由テノミ凝集セラレテ他種ノ血清ニ感應セザルトノ事實ニ基キテ考フレバ室扶私菌ニモ之ニ特異ナル凝集素ノ存在ス可キハ推理難カラザルナリ「ウイダー」氏カ三百九十人ノ健康人及他病患者ノ血清ヲ檢シテ十倍稀釋ニテハ一回モ凝集力ヲ有スルモノニアラズト云シヲ以テモ比較的健康人等ノ血清ニ凝集力ヲ有セザルコトヲ窺フニ足ルノミナラズ凝集素ノ性質的乃至分量のニモ差異アルヲ知ルニ足ル可シ但シ凝集現象ノ境点(Reactions Grenz)ヲ定ムルハ其反應著明ナル場合ニ於テハ容易ナル可シト雖モ而カモ現象遅々トシテ確カナラズ處々凝集ニ類シテ集リ一部ニハ細菌個々不動ニ止マリ若シクハ微力ニ尙運動ヲナス場合ニハ十一何レニ屬スベキヤ此域点ヲ定ムルハ實ニ容易カラズ「ステルン」氏ハ云フ懸滴標

本ニ於テ血清ヲ混シテヨリ二時間内ニ細菌悉ク大小部落ヲナシテ集合スルモノヲ積極反應ナリト此境点ヲ定ムルノ如何ニ由テ成績ニ差異アルヲ免レズ予ハ十一人ノ健康人ニシテ曾テ腸室扶私病ニ罹リタルコトナキモノヲ檢シテ十倍以上ニ反應セシモノハ予自身ノ血清ノミナリキ實ニ予ノ血清ハ十五倍迄反應シタリ而シテ荆妻ノ血清ハ十倍ニテ細菌ノ三分ノ二ハ不動トナリ孤立スルアリ又ハ稍著シク集合セシモノヲ見タリ「ステルン」氏ノ規定ニ準ゼザルガ故ニ之ヲ凝集トシテ看做スコト能ハザリキ、

腸室扶私患者ノ血清ニ依テ起ル凝集反應ノ分量の境点ハ諸家ノ實驗ニ徴スルモ未ダ確カナル標準ヲ得ズ眞性腸室扶私ニシテ十倍稀釋ニ漸ク反應スルモノアリ五千倍稀釋ニテ尙反應著シキモノアリテ「グルウベル」「チームケ」一定ナラズ要スルニ腸室扶私患者血清ハ室扶私菌免疫血清（五十万倍尙反應ス）ニ比スレバ遙カニ弱キ凝集力ヲ有スルモノナリ（「グルウベル」）然レハ病床上檢査ノ場合ニハ三十倍五十倍八十倍ノ三種トシ此範圍内ニ於テ凝集ヲ呈スルモノハ室扶私病ト診斷スルモ深キ過チナカルベシ如何トナレバ三十倍稀釋ニテ反應ヲ有スル血清ハ健康人等ニハ稀ニシテ多クトモ二%ノ超ユルコトナケレバナリ（「ビベルスタイン」）然レハ三十倍以下ニ於テ反應セザルモノ必ズシモ腸室扶私ニアラズト云フヲ得ズ十倍稀釋先ヅ試ム可シ二十倍尙ホ然リ十倍又ハ二十倍ニテ反應スルモノアランカ須ク疑診トナシテ處置シ他日試驗ヲ再ビスベシ果シテ腸室扶私ナレ

バ三十倍以上ニ反應セザルモノ稀ナリ「キユーナウ」ハ五十倍六十倍ニテ反應セル非室扶私患者ヲ
 報ゼリト雖_レ此之レ異例トナスベシ然_レ既ニ此破格アリトセバ尙ホ高度ノ稀釋血清ヲ用井テ反應
 ヲ檢スベシ高度ノ凝集力ヲ有スルニ從ヒ益々診斷ヲ確カナラシム然_レ通常ハ如此高度ノ稀釋必
 ズシモ要スルモノニアラズシテ三十倍以上五十倍ニ反應スルトセバ室扶私病ト診斷シテ誤ナカル
 ベシ「ステルン」「スクローウエル」「ビベルスタイン」腸室扶私ニ罹リテヨリ幾許日ニシテ血清中
 凝集力ヲ生スルヤヲ知ルハ實際必要ナリ一度ノ検査ニ於テ弱キモノ次回ニ於テ著ク強ク反應スル
 ハ腸室扶私患者悉ク然リト云フヲ得ベク此漸次反應ノ高マルハ他病患者ニハ決シテ之アルナシ
 故ニ此一事ハ能ク診斷ヲ助ケシム然_レ惜ヒカナ病ノ始メ幾日ニシテ起リ幾日ニシテMaximumニ
 達スルカハ未ダ其消息ヲ知ル能ハズ通常第二週ノ始メニ起ルモノハ最も多ク(35%)「ビベルスタ
 イン」(ニヨル)次ハ第三週第四週ニシテ30%第五週ハ25%ナリ第六週第七週ニ至リテ起ルモノ稀ニ之
 アリ第一週ニ起ルハ比較的稀ニシテ1%ニ過ギズ(Westbrook氏ハ千〇十九人ノ血清ヲ檢シテ其10
 %ハ發病後三日40%ハ七日ニシテ反應ヲ呈セリト(1=25—1=30ノ比例ニテ)彼是相比スレバ殆
 ンド類同セル成績ナリ之ニ由テ室扶私患者ノ血中凝集力ノ生スルハ比較的速カナルモノニアラズ
 シテ通常早キモ六日乃至八日ナルガ如シ「グルーベル」「ビベルスタイン」「ウイダー」等「ビベ
 ルスタイン」ハ腸室扶斯ニシテ凝集反應ヲ起サ、リシモノ一名ヲ檢シタリト雖_レ此患者ハ病床上

ノ諸症多分備ハリシモ輕症ニシテ僅カ十二日ニシテ退院セルガ故ニ爾後ノ經過ヲ知ル克ハザリシモノナリト

「グルーベル」ハ二週三週ニシテ反應ナキ患者二人ハ三十九日七十四日ニ至リテ始メテ積極反應ヲ呈セルモノヲ見タリト云フ病ノ經過中凝集力ニ増減アルヤ否モ未ダ確カナラズ或人ハ熱發最高ノ時ニ凝集力強ク解熱時ニハ著ク或ハ殆ンド全ク凝集力ヲ失フモノアリト云フモ多數ノ場合ニ於テハ病ノ經過後數月又ハ數年ニ亘リ尙ホ凝集力ヲ存スルモノナルハ「ウイダール」ノ特ニ主張スル處ニシテ (Weinberg) ハ之カタメニ室扶私經過シタルモノ百〇七人ニ付テ檢セシニ十倍稀釋ニテ三十四人ハ積極反應ヲ呈シ是等ノ人ハ三、八、十、十一月二年ヲ經過セシモノナリシト云フ (Courmont) ハ百四十人ノ室扶私患者ヲ檢シ悉ク反應ヲ呈セシモノ恢復後ニハ兒童ハ二ヶ月ノ后ニ大人ハ四五ヶ月ノ后ニ凝集力ヲ失ナヒ其内十四人ハ一年后ニ檢シテ二人ノミ反應ヲ有セリト (Frankel) モ一年后ニハ凝集力消失セシコトヲ檢セリ故ニ「ウイダール」ノ信スル如ク數年ニ亘リ依然トシテ凝集力ヲ存スルハ稀ナルコナラン

室扶私患者ノ血中凝集力ノ起ル所以ハ之ヲ説明スルノ好材料ヲ有セズ「ウイダール」ハ比較的室扶私病ノ初期ニ發記スルガ故ニ之ヲ感染反應ナリト信ゼリ「グルーベル」ハ之ニ反シテ室扶私菌毒ニ免疫セラル、微ナリト云ヘリ之ニ依テ都築軍醫ハ之ヲ究メンガタメニ細菌產物菌體(死滅シタルモ

ノ) 及び細菌產物及び菌體ノ混合物ノ三種ヲ以テ三頭ノ山羊ヲ室扶私病經過ニ擬シテ免疫ヲ始メ
タリ而シテ第一日ヨリ毎日凝集力ト免疫力トヲ檢ゼシガ第一回注射(室扶私第一日ニ擬ス)ノ后第
三日(室扶私第三日ニ擬ス)ニシテ已ニ血中著シク凝集力ヲ生セリト而ゾ細菌產物ヲ以テ免疫シタ
ルモノハ凝集力ノミ強ク顯ハル、モ抗毒性免疫力ハ第四週ノ末日ニ至ルモ發起セザリシ之ニ反シ
テ菌體免疫ノ羊血清ハ抗毒性免疫力強クシテ凝集力弱ク混合免疫ノモノハ兩力共ニ強大ナリシト
氏ハ之ニ由テ凝集力ナルモノハ細菌產物ノ免疫反應ナリト論セリ然ラバ凝集力ハ病ノ經過殊ニ其
ノ輕重トハ深キ因縁ナキモノナルガ如シ「フレンケル」ハ凝集力ノ強弱ハ病ノ輕重ト相一致スルガ
如ク想ヘリ殊ニ又(Cournout)ハ日々体温ト凝集反應トヲ檢ジテ弧線圖ヲ作リテ其關係ヲ見レバ病
勢ト一致シ而カモ之ニ由テ豫後ヲ卜定シ得ルト氏曰ク体温高ク共ニ凝集力強キモノ体温中等強キ
モノハ豫後良ナリト故ニ氏ハ凝集力ナルモノハ實ニ自衛力ナリトノ考ヲ有セリ若シ果シテ信ナリ
トスレバ大ニ興味ナキニアラズト雖モ多クノ人ハ暗ニ非難ノ聲ヲ洩セルガ如シ上來述べタルノ外
ニハ未ダ判斷ヲ確カムベキ好材料ニ接セザルハ憾少ナシトセズ今ヤ此稿ヲ結了セント欲スルニ當
リテ「ワイダール」氏反應ノ病床利用上ノ注意ヲ喚起セントス

「キユーナウ」氏曰ク第一ニ室扶私血清非室扶私血清ハ定性的ニハ適切ノ判斷ヲナシ得ベカラズ故
ニ精密ニ知ルヲ要セバ稀釋度「クルツール」中細菌ノ多少及び「クルツール」ノ新舊ヲ撰ビテ定量的

操作ヲナサ、ルベカラズ第二ニハ血清診斷ハ多分積極反應ヲ呈スルモノナレバ或ハ弱ク或ハ更ニ反應セザルニアリ此場合ニハ數回反復検査ヲ行ハザルベカラズ

此二則ヲ標準トシテ病床上ニ利用セバ疑診ノ場合又ハ二種ノ熱性病合併スル場合ニ於テ大ニ鑑識ヲ助クルニアルハ諸家ノ報告ニ乏シカラズ故ニ血清診斷ハ疑診ノ場合ニ必ズ之ヲ試ムルヲ以テ醫タルモノ、本分トナスベキ者ナランカ (完)

● 兩側卵巢囊腫ノ一例

通常會員 吉川 砥直

余ガ茲ニ報告セント欲スル一例ハ恩師小川教授示教ノ下親シク實驗スルヲ得タルモノニシテ其稍々稀有ノ症タルガ故ニ不文ヲ顧ミズ敢テ同好諸氏ノ高覽ニ供スト云爾

患者 松本某婦、年齢二十六歳 酒店家族

明治三十一年七月十二日金澤病院婦人科クリニツクニ來リ診ヲ乞フ、

既往症 稟賦強壯大患ニ罹リシヲナク十六歳ノ三月初經潮來シ爾后整然トシテ亂レズ毎月經持

長三乃至四日ナリ、十六歳ニシテ嫁シ十七歳初メテ分娩シ后尙ホ二兒ヲ舉グ妊娠分娩產褥ニ異常ナク二男兒一女兒共ニ健存ス終産ハ二十四歳ノ時ナリキ